23

24

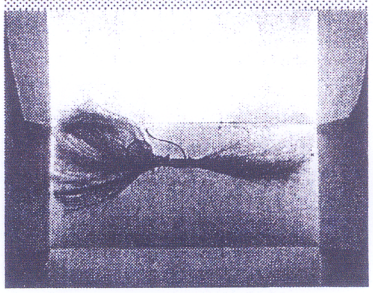
25

朝日新聞（夕刊）

シーボルトの遺髪 長崎へ

「平和な国へ」の夢 生誕二百年にかなう

鎖国時代、長崎・出島のオランダ商館医で日本研究家だったP・F・フォン・シーボルト（一七九六―一八六六年）の遺髪＝写真＝が、ドイツ在住の子孫が保管していた資料の中から見つかった。遺髪の存在はこれまで知られておらず、シーボルト生誕二百年の今年、一部が長崎市に寄贈される。



シーボルトは、日本を思い浮かべては「私は平和の国へ行く」と言い残して亡くなったと伝わる。その願いがようやくかない、長崎のシーボルト記念館の目玉展示品となる。

子孫が発見、寄贈へ

遺髪の保管者は五代目子孫、コンスタンチン・フォン・ブランデンシュタイン・ツェッペリンさん（四三）。長崎市のシーボルト記念館専門員の宮坂正英・長崎純心大学講師（四二）が昨年二月に調査した際、シーボルトの次男ハインリヒに関する未整理資料から見つけた。長さ約十二㌢、直径約二㌢に束ねたダークブロンドだ。

台紙に「愛する母によって切り取られた、忘れ得ぬ偉大な父の髪」と書かれ、シーボルトの長女ヘレーネの署名がある。台紙で包まれた遺髪は、黒い縁取りの封筒に収められ、表にハインリヒの署名で「私の偉大な父の髪／一八六六年十月十八日死去」とある。

ドイツ・ビュルツブルクのシーボルト博物館は子孫の保管状況や署名の筆跡などからシーボルトの遺髪と断定した。

シーボルトの日本に対する思いは強く、オランダ政府に「植民地にせず、貿易の中継地点として対等に付き合うべきだ」と進言した。晩年は、日本の収集資料を博物館に展示するための整理に没頭するあまり、体調を崩して亡くなった。臨終の床で「私は、美しく平和な国へ行く」とつぶやいたと妻が伝えている。

コンスタンチンさんは「シーボルトはオランダ公使として三度目の訪日を果たすことを切望し、死ぬまで日本を愛し続けた。『平和な国』とは、間違いなく日本のことだ。願いがかない、シーボルトは喜んでいると思う」と話している。

遺髪は生誕二百年の十七日、シーボルト博物館で公開された。日本では、五月一日に長崎市で始まる記念展に合わせてコンスタンチンさんが来日し、遺髪を寄贈する。

The Asahi (Newspaper) Evening Edition. 26

February 24, 1996. Saturday.